



栄光の岩壁(下)

新田次郎



えい とう がん べき  
栄 光 の 岩 壁  
下 卷

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 122 J

昭和五十一年十月三十日 発行  
昭和五十一年十一月二十日 二刷

著 者 新 田 次 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部(〇三)(二六六)五一  
編集部(〇三)(二六六)五四二  
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

栄 光 の 岩 壁

下 卷

新 田 次 郎 著



---

新 潮 社 版

2359



栄光の岩壁 下巻



## 第三章 結 婚

## 1

竹井岳彦<sup>たけひこ</sup>はしばらく山に遠ざかっていた。山には行きたいが、山に行くとおい、ヨーロッパアルプスはどうだったとか、アイガーに登ってきたのかなどと訊<sup>き</sup>かれた。そのほとんどには冷笑<sup>ちやうしょう</sup>とも嘲笑<sup>ちやうしょう</sup>ともつかぬ笑いが伴っていた。なかには、真面目くさった顔で、もう帰って来たのかなどという者もいた。ほんとうに岳彦がヨーロッパへ行ったと思ひこんでいる者もいたのである。そういう人に、いちいち説明するのは面倒だし、だいいち、自分の恥を自分の口からいうのは厭<sup>いや</sup>であつた。津沼春雄とのヨーロッパ行きは、戦後日本人登山家がヨーロッパアルプスの岩壁に挑戦したという例がないだけに、登山家仲間にはかなり広く伝えられていた。それが詐欺に掛つたという、まことにお粗末な結果に終わっただけならまだいいが、彼が、処女出版『山の足音』の印税を前借りして、そっくりやられたというあたりになると、同情を越えて、岳彦に対する人間批判も出て来るのであつた。

あいつは人がよすぎる、というのは、好意的な見方で、あいつは山にばかりいる間に、山の

神様に一本何かを抜かれているのじゃあないか、などという者もあった。とにかく、竹井岳彦のまぼろしのアイガー登攀は、山男たちの格好の話題となった。

岳彦は、東京の家にこもっていた。山へ行くとしても、近くの、三ツ峠の岩場とか、つづら岩とか、丹沢の岩場などで、ごく親しい山仲間とザイルを組んでいた。

吉田広とつづら岩で会った。若手クライマー中のホープと目されている吉田広は、小さな山岳会の登攀講習会に講師として招かれて来ていた。吉田広は、謙虚な男だった。他人の前で彼の技術を誇ったり、威張ったりはしなかった。丁寧すぎる言葉で、むしろ、はがゆいような言葉で指導している彼を見ると、彼が二十歳の若さで北岳バットレス中央稜冬期登攀のトップに立った男とは想像されなかったし、彼の渾名の「ラッセル車」とか「猛牛」のいわれも、彼の温和な顔や、やさしい声の中から推測することはできなかった。

吉田広はひととおりの講習が終って、休憩時間に入ったとき、帰り支度をしている岳彦のところに来て言った。

「もう帰るんですか」

「そう何へんもやるところでもなさそうだからね」

岳彦はそう答えると、吉田広と顔を見合せて笑ってから、つづら岩のグレンデに眼をやった。岩壁に違いがないが、彼等一流のクライマーにとっては、そこは飽くまでもグレンデであった。「実は、竹井さんにお願ひしたいことがあるんですが」

吉田広は、その端麗な顔に微笑をたたえて言った。吉田広の小さな声は、まるで少女がささやくようであった。

「お願いされたことはめったにない。聞こうじゃあないか」

「ありがとうございます。これでほっといたしました」

吉田広は胸をなでおろした。

「おいおい、おれはまだ何にも聞いてはいないのだぞ」

「でも、竹井さんがうんと言った以上、もう大丈夫です。実はいい人がなくて困っていたんです」

そこで吉田広は、懷中ノートを出して、その終りの方を開いて言った。

「フリッシュという運動具メーカーを御存じでしょう。近ごろはフリッシュと銘を打ったハーケンやカラビナも出廻っています」

吉田広は腰に携<sup>さ</sup>げていたカラビナの一つを取ると岳彦の手に握らせた。

「フリッシュか、知っているよ」

岳彦はカラビナのパネをパチンと一つはじいて、裏返した。FRISCHと刻印があった。ドイツ語のフリッシュをそのまま頂戴<sup>ちやうだい</sup>するのは、まあいいとして、フリッシュと刻印せずにFRISCHとやるのは、何かその製品が輸入品であるがごとき感じを与えた。フリッシュはドイツ語で『新鮮』であったが、そのやり方は、けっして新鮮には思えなかった。

しかし、山道具の製品の多くは、このように横文字をそのまま用いているのが現状だから、あながちフリッシュを責めるには当らなかった。

「フリッシュの社長がしっかりした登山家の顧問を探しているんです。もともとフリッシュは運動具のメーカーではなくて、仏具屋だったんです。それが、百八十度向きを変えてメーカーにな

り、最近は山道具に手を出すようになったのだから、いろいろ技術的に分らないことができて来るのです。そこを顧問で切り抜けようというわけですが、何ぶんにも、その顧問料が月一万円……」

「毎日出勤して？」

「顧問だから、月に一度か二度、呼び出されたときだけ、出掛けて行けばいいんです」

岳彦は吉田広の顔を見た。それではあまりにも話がうま過ぎるではないかと思った。岳彦は前に一度運動具店に勤めたことがあった。その経験からすると、その話を、そっくり信じているものかどうか疑わしくなる。

「すみません竹井さん、そんな悪い条件でお願いして」

「条件はちっとも悪くない。よすぎるのが、気になるのだ。一度、その会社の社長に会ってみよう。引き受けるかどうかは、それからにしよう」

岳彦は吉田広の好意を感謝した。吉田広のいうことならまず間違いないだろう。しかし、吉田広はあまりにも若すぎる。

「竹井さん……」

と吉田広は声をひそめて言った。

「この間は、ほんとうに申しわけないことをしたと思っています。あのとき、ぼくが、もっと真剣になって、あなたを引き止めればよかったんです。古物の外国切手を貼った偽手紙などを持っている津沼春雄のいうことなど、信用するなど言えはよかったんです。あのあとで、何度かあなたに、そう電話を掛けようと思って、とうとう言わずじまいにしたばかり自身の弱さを恥じ入って

います」

吉田広は深く頭を垂れた。

「いいんだ、もうあのことは」

岳彦はあのこと二度と触れたくはなかった。彼はつづら岩に眼をやった。三つのパーティーが、その岩壁に取り付いていた。赤いザイルが秋色の濃い、山の景色の中に一段と冴えて見えた。

岳彦は御徒町で電車を降りて、フリッシュを尋ねて行った。そこには事務所と、倉庫の一部があるだけで、工場はなかった。メーカーだから工場があるだろうと思って来てみると、ほとんどの運動具は下請けに作らせていて、フリッシュが直接運営している工場はなかった。

「おやじですか、いま下請けのところへ行っていますから一時間ほど待って下さい」

従業員の一人が言った。社長のことを社長とは言わず、おやじというあたりが、フリッシュの内容をそのまま示唆しているように思われた。

岳彦は、五十年輩のあぶら切った小資本家を想像した。仏具屋の小僧からたたき上げたという男だから、ひと筋縄ではいかない、欲の皮が突張った、朝から晩まで金のことしか言わないような男を頭の中に描いていた。

一時間ほど経ったころ、その部屋に、風采ふうさいの上らぬ小男が入って来た。そっと入って来て、岳彦に懇懃いんぎんきわまる挨拶をすると、岳彦の前の椅子に坐った。

「この度は、御無理なお願いをしてすみませんでした」

小男はそう言った。それで岳彦は、その男が社長の稲沢鉄太郎だと分った。そう言わなければ、

岳彦と同じように、フリッシュの社長を訪ねて来た客の一人と間違えるところであった。

「顧問というと、いったい私はどういうことをすればいいのでしょうか」

岳彦はまず最初に、顧問なるものの定義から訊いた。

「さあ、私にもよく分りませんが、とにかくあなたが、うちの顧問になっていただけるというだけで、ありがたいんです。そのうち、あなたにしていたただかねばならないことがきつと出て参りますから、そのときそれをやって貰えばいいのです」

稲沢鉄太郎は言った。

壁 岩 の 光 栄  
「どうも、それだけでは何か雲をつかむような話ですからもう少し具体的に言っていただけませんか。たとえば、月に何回出て来るとか、顧問としての私の仕事に対して、何かいただけるものかどうか……」

給料が月に一万円だというのはほんとうかと、面と向っては訊けなかった。

「俸給は月一万円さし上げたいと思っています。そうですね、毎週木曜日に出て来ていただくことにしましょうか。その間に、何か用がありましたら、こちらから電話をいたします」

稲沢鉄太郎は、岳彦を事務室につれて行って、十数名の社員に紹介すると、すぐ、彼の為に、窓側の明るいところに机を一つ用意してくれた。

竹井岳彦は、その日を境に顧問という名の会社員になった。当時は大学出の初任給が一万三千元であった。月に四日出勤するだけで一万円というサラリーはかなりな高額であった。岳彦は、まだまだほんとうには、稲沢鉄太郎を信用してはいなかった。

（この裏には、何かからくりがあるかもしれない。どっちみち、しばらく、こうしておれば分る

ことだ)

彼は退屈な一日を過して家へ帰った。母の菊子が心配そうな顔で彼を迎えて、会社のことを聞いた。父も帰って来て同じようなことを聞いた。

「一週一回で月一万円の俸給はどう考えても高過ぎるな」

岳彦がしきりにそれを口にする、

「世間一般の顧問料となれば、そう高いものではない。要は、お前がそれに値するほど山道具に精通しているかどうかということである。お前が山道具にかけてベテラン中のベテランなら、その顧問料はけっして高いものではない」

父はそう言った。父はうれしそうであった。大学を途中でやめて、山にばかり行っていた岳彦が、顧問という資格にしても、職を得たことは父親として喜ばしいことであった。

### 第三章 結 婚

「しかし、一週間に一回というのも困ったものだ。あとの六日間はいったい、お前は何をして

父に言われるとおりだった。岳彦は、その翌日から、身体を持てあました。毎週木曜日に出社と決っておれば、そう遠くの山にはいけなかった。山へ入ったら、一週間や二週間は家へ帰らないというようないまままでの生活はできなかった。

岳彦は翌日、日暮里<sup>にっぽり</sup>駅から御徒町駅までの定期を買った。月に百八十円であった。彼は毎日、母のこしらえてくれた弁当を持って会社へ行った。

会社はかなりいそがしかった。伝票の整理、記帳、封筒書き、下請けの督促、問屋からの電話の応答、出荷など朝九時ごろから、そのさわがしさが始まると、午後の五時か六時ごろまでつづ

岳彦には仕事はなかった。社長から仕事を与えられないかぎり、他人の仕事に手を出すことはできなかった。

彼は自分の机に坐って、山友達宛に就職したことを知らせる手紙を書いた。葉書一枚一枚同じような文句を書いたが四、五枚書くとそれにあきた。彼は、葉書に絵を描き、その余白に、フリッシュに就職したことを簡単に書いた。絵はフリッシュの製品を書いた。正確に書くために、それらの道具を彼のテーブルの上に並べた。

「竹井さんは絵が上手なんですね」

などと、のぞきこんで通る社員がいた。

三日目には社長の稲沢鉄太郎が岳彦を呼んだ。

栄光「あなたは、なかなか味のある絵を書きますね。どうです、うちの広告をやってくれませんか。あなたがさっき書いたような絵をちよつと入れると、引き立って見えるでしょう」

社長は岳彦のことをあなたとまだ言っていた。それが岳彦には気に入らなかった。顧問という名に對しての、社長の遠慮とも考えられた。岳彦は家に帰って辞書を引いて見た。顧問とは相談を受ける職務、又は相談を受けるその人のこと、とあった。

岳彦は広告文を書きながら社長のことを考えた。岳彦が下手な絵を葉書に書きこんでいるのを、横目で見て通っただけで、彼と広告の仕事を結びつけた稲沢鉄太郎は、普通の男ではないと思つた。そして岳彦は、彼の戯画が、面白い絵だと評されたことに感動し、その絵が広告に使用されることになったので、いささか緊張した。

岳彦は広告文を書いた。

伝統と技術に輝くフリッシュ、新鮮な技術が生んだ製品、新鮮な技術と新鮮な製品、フリッシュの製品はたよりになる、などの広告の短文を考え出し、それに、登山用具の絵をあしらった。「なかなかいいですね。しかし、これはフリッシュの製品全体に通用する広告文の感じだから、そっちの方に使わせて貰うことにして、あなたは、山道具だけに限った広告文の構想をもう一度考え直してくれませんか」

言葉は丁寧だったが、その中には、きちんとしたはじめがあった。やはり岳彦は、山道具の顧問としての存在でしかなかった。岳彦は、山道具の宣伝文、広告文を書いた。

フリッシュのザイルに命を託す。フリッシュのピッケルを持って冬山へ、伝統の技術が生んだフリッシュの山道具、フリッシュの山道具ならアイガーにも登れる、などの宣伝文を次々と書いた。生れて初めての俸給を貰った。そつと袋の口をあけてのぞいて見ると、千円札が十枚以上見えた。数えてみると、二万円だった。岳彦は、その俸給袋を会計係の男のところに持って行って、だまってさし出した。

「間違えていますよ」

会計係の男は、そろそろ五十に手が届く年輩だった。強い近眼だった。机に張りつくようにして、こまかい数字を帳面に書きこんでいた。会計係は、岳彦が間違っていると言った俸給袋の中身を、岳彦の前で勘定し直した。

「ちゃんとあるじゃありませんか」

「しかしぼくは……」

一万円のはずだと言おうとするのを会計係は押えて、おやじさんに訊いてくれと言った。

稲沢鉄太郎は、一万円が二万円になった理由を手短かに説明した。

「あなたは、週一回だけ来ればいいのに、一カ月間一日も休まずに働いてくれたばかりでなく、その俸給にふさわしい仕事をした。だから二万円さし上げたのです。もし二万円でよかったら、顧問ではなくて、社員になっていたいただきたいのですが、そうすれば私も助かります、考えていただけませんか」

考えてみるもみないもなかった。二万円といえば、高校、大学、就職、昇給と順調に進んで行った、彼と同年輩の者の俸給であった。彼は二つ返事で社員となることを承知した。

「では早速、店の者にそのことを知らせましょう」

稲沢鉄太郎は、岳彦を事務室へ連れて行って、全員に社員になったことを伝えた。

「今日から、竹井君には宣伝の他に、登山用具の新製品の研究と開発の方を担当して貰うことに  
栄　光　の　岩　壁  
なった」

岳彦は、稲沢鉄太郎が、竹井君と言ったのを耳あたらしく聞いた。それまでは、竹井さんで通っていたのが、顧問から社員になったとたんに、竹井君になったことが意外だった。宣伝の仕事のほかには登山用具の開発という仕事を与えてくれたのも一方的であった。或いは、稲沢の頭の中には初めからそのことがあったのかもしれない。

その日岳彦は、生れて初めて貰った俸給で買ったケーキを持って帰宅した。母の菊子が眼頭を拭いた。

その夜は甲府の兄が、久しぶりで上京していた。

「二万円の俸給とはたいしたものだ。そのかわり、お前はもう山へは行けないのだぞ」

兄にそう言われて、岳彦は初めて、稲沢鉄太郎が考えてみないかと言ったことを思い出した。それはこのことだなと気がついたがもう遅かった。二万円の代償として、山を失ったことは岳彦にとって重大事であった。

「世の中はお前が考えているほど甘くはないのだ。週一回の顧問だって、そのために、お前の自由が拘束されることにおいては、社員とそう変りはない。どっちみち、サラリーマンは自由を拘束される代償として月給を貰っているのだ。岳彦も、そろそろ結婚を考えねばならない年頃だから、ここで、はっきり山と絶縁して仕事の方に精出すことだな」

兄の言葉を岳彦は、うなだれて聞いていた。考えてみると、フリッシュのおやじにうまいことしてやられたようにも考えられた。山と引き替えに二万円なら、その二万円は安すぎた。山へ行けないくらいなら死んだ方がまだと彼は思った。一般のサラリーマンは、年に一週間か二週間の休暇を山で過しているのだから、彼等と同じような時間の使い方をすれば、これからだって山へは行ける。あきらめに似たものが彼のたかぶった心を静めた。

翌朝、岳彦が出勤すると、稲沢鉄太郎が待っていた。

「ピッケルの新製品をデザインして貰いたい。いままでのようなありふれたものではなく、形もいいが、中身もいいという一流品を作りたい」

稲沢鉄太郎の口調はいままでと違っていた。顧問ではなく社員に対する命令だった。

「やりましょう。ぼくは以前から、ピッケルについてはちよつとしたアイデアがあったんです」それは事実であった。ピッケルには外国製品、日本製品取りまぜて非常に種類が多かった。そ